

「消し残した落書き」

東京都 宿本楽

我が家には、ぼくのことを呼び捨てにする生意気な四歳の妹がいる。

ぼくが小学三年の春休み、目の前で、この生意気な妹は産まれた。お産に立ち会ったのだ。

目の前で産まれた妹だったが、ぼくは実感できずにいた。

父は穏やかな表情でぼくたちを見守っていた。母はさっきまで苦しんでいたのに、一転して、幸せそうな表情をしていた。すぐ下の妹は、不安そうな顔をしていたのに「抱っこしたい」とはしゃいでいた。

産湯に入り、きれいになった妹を抱かせてもらったとき、ようやく実感できた。

元気に産声をあげ、手足をバタバタさせて産まれてきた妹は目が腫れてあまりかわいいとは思えなかった。「お兄ちゃんに似ているね。」看護婦さんに言われ、複雑で、照れくさくて、ちょっとうれしかった。

春休みが終わり、新学期、急ぎ足で学校に向かった。先生やみんなに妹の話がしたくて自慢したかった。

学校でもずっと妹のことを考えていた。何をして遊ぼうか、何をしたら笑ってくれるか、そんな事ばかり考えていた。学校が終わると誰よりも早く教室をでて、急ぎ足で帰った。

あの時、ただただ、かわいかった妹は、今ではぼくが飲もうとしていたジュースを勝手に飲み、ぼくに「早く寝なさい」と偉そうに言う。それにしても生意気な妹である。「せめてお兄ちゃんと呼んでくれよ」と何度言っても呼び捨てで呼ぶ。

「もういいよ」、とあきらめ、机に向うと、たくさんの落書き。仕方なく消していると、「おにいちゃん」と書かれている。よくみると「に」という文字が逆さになっている。「仕方がないな」、しばらくこのままにしておこう。